中国がシンガポールと共同で進める環境都市開発
～天津エコシティ～

北京事務所

経済成長重視で、ＰＭ2.5、水質・土壌汚染といった環境問題ばかりが目に付く中国ですが、一方で省エネ・環境保護の両立を目指した取り組みも行っています。日本各地で行われているスマートシティの取り組みのようなものから、ゼロから省エネ・環境保護都市を作ってしまう大規模プロジェクトまでさまざまです。

このたび、クレア北京事務所による鹿児島県への活動支援において、その中でも最大級のプロジェクトである天津エコシティの視察を行いました。中国とシンガポールが共同で国家プロジェクトとして建設を進める、天津エコシティの様子を紹介します。

最新の環境技術を採用

天津エコシティは、正式名称を「中新天津生態城（中国・シンガポール天津エコシティ）」とし、中国とシンガポールが共同で建設、運営を進める国家プロジェクトです。

天津エコシティの完成予定模型

天津市の中心から東へ 45ｋｍほどのところに位置する、利用放棄された塩田地帯において計画されました。南商業区、中心区、北商業区の３つのエリアから構成され、完成後の総面積は30平方ｋｍ、東京都渋谷区と目黒区を合わせた程度の広さとなります。2020 年を完成目標とし、2008 年から建設が始まり、2014 年 11 月時点において、住宅地区が中心となる８平方ｋｍの南商業区が完成しています。

パイプラインでのゴミ収集システム

ゼロベースから造られた町であるため、試験的な技術などが導入しやすく、多くの最新技術が取り入れられています。

例えば、パイプラインでのごみ収集システム。建物内のゴミ箱、街路のゴミ箱にパイプラインが繋がっており、自動的に集積されます。この技術は、既に 2008 年の北京オリンピックと 2010 年の上海万博で試運行されていたものですが、天津エコシティで本格的に取り入れられました。再生水の取り組みも進めています。天津エコシティ

のおよそ６割は緑化面積としていますが、天津をはじめとするこの地域は、乾燥の激しい少雨地域です。緑地を維持するためにも、廃水はすべて浄化処理したのち緑地へ還元されます。ほかにも、雨水集積システム、海水淡水化システムも備え、2020 年までに水利用量全体の 50%を再生水でまかないたいとしています。その他、街中のいたるところに風車や太陽光パネルが敷設してあり、再生エネルギーの利用を進めています。将来的にはエコシティ内の路線バスを全て電化する予定であり、バスターミナルには大規模な電気自動車充電器が設置済みです。また、これら公共交通の利用を促すため、路線バスの利用は全て無料となっています。

道路脇の駐車場に並ぶ太陽光パネル

鬼城化も懸念……

2020 年の完成を目指すエコシティですが、建設局の担当者によれば、建設自体は順調とのこと。問題は人口の伸び悩みにあるといいます。目標では 2020 年の人口を 35 万人としていますが、現在は 2 万人。建設途中とはいえ、３つのエリアのうち、住宅地の中心となる南商業エリアはすでに完成しています。中国でマンションを購入する場合、部屋の間取りから、壁紙、水周りまですべて自分で内装工事をするのが一般的です。しかし、エコシティでは、内装の環境基準を満たさなければならないため、内装済みのものを販売することになっています。自分で内装工事を行うことに慣れている中国人にとってはその点も不満となり、購入に二の足を踏ませているのではないかとのことでした。

さらに、このエコシティは鬼城（ゴーストタウン）として有名な浜海新区内に位置します。浜海新区は総面積 2270 平方キロという広大な開発区に、ニューヨーク、東京に匹敵する巨大都市をつくろうとしたもので、あまりに壮大な計画に現実が追いつかず、現在は開発区全体が鬼城化してしまったと言われるものです。開発主体である天津市の負債は５兆元（約９５兆円）ともいわれており、エコシティの建設遅れも懸念されます。完璧な都市計画はうまく行かないと言われますが、環境というテーマのもと、見事に計画された天津エコシティは一見の価値があり、街づくりにおいても大いに参考になるものだと思います。

クレア北京事務所では、自治体からの希望に沿い、活動支援として視察のアレンジなどを行っています。なかなか行政施設の視察が難しい中国ではありますが、まずはご相談ください。

（田村所長補佐　鳥取県派遣）